

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

( 2 年計画の 2 年目)

## 1. 研究課題

環世界の人文学——生きもの・なりわい・わざ

The Studies of Umwelten: The Lives and Lived Worlds of Human and Nonhuman Beings

## 2. 研究代表者氏名

大浦康介

OURA Yasusuke

## 3. 研究期間

2015 年 4 月 - 2017 年 3 月 (2 年度目)

## 4. 研究目的

「生きもの」として「生きる」とはいったいどういう営みなのだろうか。その形態、技術、境界に着目しながら従来の人文学からの脱皮を目指すことが本研究の課題である。ドイツの生物学者ヤーコブ・フォン・ユクスキュルは、生きものの営みと、その営みがなされる世界との相互関係を「環世界 Umwelt」と呼んだ。この言葉が自然科学ばかりでなく、人文科学においても多大なる影響を及ぼしてきたことは周知のところである。ヴァイツゼッカーの『ゲシュタルトクライス』やその紹介者でもある木村敏の一連の仕事はもちろん、歴史学における環境史の活性化にも、人間と非人間の関係性を主題とする人類学的理論の深化や、近年の哲学等における「動物論」の隆盛にも、そのことは容易にみとられる。人間と人間以外の「生」の営みを同じパースペクティブで論じることを、先行者たちは試みてきたのである。本研究班でも、こうした先行研究を引き継ぎつつ、しかし「環世界」を単なる抽象概念として扱うのではなく、生きもののあり方、生きもの相互の「あいだ」や「空気」、さらにはそれらの関係のなかで生まれる技術や言説など、具体的な事象に寄り添いながら考えることを主眼に据えている。その射程は、たとえば多種多様な「生きもの」が関係する災害、開発、農林漁業、鉱業のみならず、心的生や精神病理学的事象にまで及ぶ。それは無文字の知もあわせて、「生きもの」としての人間が培ってきた生き抜くための知＝「人間力」を理解することにもなろう。近年の人間と自然をめぐるさまざまな齟齬や葛藤は、これまでの自然科学や人文・社会科学では捉えきれないダイナミズムを有している。それは、総合的な知の営みであったはずの人文学それ自体の限界を示しているともいえる。人間を、人間そのものとしてだけではなく、その境界や「界面」から捉え直すことが、かえってより深く人間を理解することにつながるのではないか。本研究の根底にあるのはそのような問い

かけである。

## 5. 本年度の研究実施状況

本年度は、班員各員による個別課題についての研究報告を中心に例会を開催するとともに、特に動物論に関わってゲスト・スピーカーを招きながら、環世界論および人間的主体の再検討の議論をさらに発展させた。個別課題研究では、個人と外部環境(社会関係も含む)との関係性の検討から主体を問い直す報告(立木、唐澤、田中雅一、松嶋、平野、田中祐理子)と、人間の集団的な生活様態と自然環境との間に生じる相関的な影響を歴史的・人類学的に分析する報告(坂口、篠原、橋本、井黒)とがなされ、個体生と集合性の両面から主体概念をとらえ直し、環境とのかかわりを考察した。そのうえで、12月に開催したミニ・シンポジウムでは、班長である大浦によって「対面性」をキーワードに環世界論における人間の独自性が考察され、これをもとに共同研究班員およびシンポジウム参加者による全体討論を行い、研究班の活動を包括的に再検討した。

## 7. 本年度の研究実施内容

2016-04-23

対象のモノ化、モノの対象化——「媒介」される生の運命

発表者 立木康介 人文研

2016-05-23

カンギレム『正常と病理』について

発表者 田中祐理子 人文研

2016-06-06

生業と地方自治・国家—1910～60年代長野県の一山村におけるコモنزの展開—

発表者 坂口正彦 大阪商業大学

2016-06-20

南方熊楠の視座 一夢、華巖、粘菌—

発表者 唐澤太輔 龍谷大学

2016-07-04

環世界としてのニュータウン:人工空間にかんする哲学的試論

発表者 篠原雅武 大阪大学

2016-07-25

〈人間〉の創発、〈生きもの〉への接地—社会性・賭け・精神病理—

発表者 松嶋健 広島大学

2016-10-03

〈リユクレース〉とは誰／何か？

発表者 鵜飼哲 一橋大学

2016-10-17

アメリカ史と動物研究の展開

発表者 丸山雄生 一橋大学

2016-11-07

地域環境史モデル試論—フナを主体とした物語は描けるか—

発表者 橋本道範 滋賀県立琵琶湖博物館

2016-11-21

中国近世「水権」試論—水をめぐる「伝統」の形成過程

発表者 井黒忍 大谷大学

2016-12-05

アウシュヴィッツ以後環世界について語ることをめぐって

発表者 田中雅一 人文研

ハイデガーのアリストテレス解釈と歴史的環世界

発表者 平野徹之 学習塾トライ

2016-12-19

ミニ・シンポジウム「対面性をめぐって」

対面性をめぐって

発表者 大浦康介 人文研

司会 藤原辰史 人文研

対談・対面性をめぐって

発表者 大浦康介

コメンテーター 藤原辰史

2017-01-23

エチオピア農村社会の労働とエコノミー～「なりわい」の環世界的理解に向けて～

発表者 松村圭一郎 岡山大学

2017-02-06

人と野生動物の境界をめぐるせめぎあい

発表者 山越言 京大アジア・アフリカ地域研究研究科

#### 10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数	参加人数				延べ人数			
		総計	外国人	大学院生	若手研究者	総計	外国人	大学院生	若手研究者
所内	1	16 (5)	2 (1)	0	2 (1)	135 (40)	30 (12)	0	22 (10)
学内	1	10 (3)	1 (1)	7 (3)	15 (10)	40 (20)	10 (10)	25 (10)	25 (10)
国立大学	5	6 (0)	0	0	0	45 (0)	0	0	0
公立大学	1	1 (0)	0	0	0	10 (0)	0	0	0
私立大学	6	7 (2)	0	0	1 (0)	40 (4)	0	0	10 (2)
大学共同利用機関法人	0	0	0	0	0	0	0	0	0
独立行政法人等公的研究機関	1	1 (0)	0	0	1 (0)	10 (0)	0	0	1 (0)
民間機関	2	0	0	0	1 (0)	20 (0)	0	0	7 (0)
外国機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	17	41 (10)	3 (2)	7 (3)	20 (11)	300 (64)	40 (22)	25 (10)	64 (22)

※( )内には、女性数を記載

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	平成 28 年度に共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研教員等のみの論文(単著・共著)	17		2	
②人文研教員等と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	1		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	1	(0)	1	(1)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

人文研教員等には教員のほか、人文研の非常勤職員・指導している大学院生も含まれます。  
( )内は、人文研教員等が、特に重要な役割・高い貢献(ファーストオーサー、コレスポンディングオーサー、ラストオーサー等)を果たしている論文(内数)。

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

本共同研究は班長の任期の都合上、例外的に 2 年間をもって一応の区切りとしたため、紙媒体での研究成果公表はせず、本年度 12 月に開催したミニシンポをもって研究成果の公表に代えたい。